

実践**高校進学ガイダンス終了直後の振り返りの重要性****—開発型プロジェクトとしての試み—**

原田かおり（やまなし子ども学習支援連絡協議会、山梨県立大学非常勤講師）

斉藤祐美（やまなし子ども学習支援連絡協議会、山梨外国人権ネットワーク・オアシス）

小林信子（やまなし子ども学習支援連絡協議会、ユニタス日本語学校講師）

萩原孝恵（山梨県立大学准教授）

*付記 川手ちなみ（やまなし子ども学習支援連絡協議会、ソルデアミーゴ太陽の友だち）

実践の場の特徴

我々は2015年に山梨県で初めて多言語による高校進学のためのガイダンス（以下ガイダンス）を開催した。これまでに4回実施し、1回目の参加者は25人、2回目は30人、3回目は24人、4回目は34人であった。平成28年度の文部科学省の調査によると、山梨県の日本語指導の必要な児童生徒は341人で、うち日本語指導の必要な高校生は7人である。しかし、この結果は実態を反映したものなのであろうか。

目標

ガイダンスの継続が目標である。ある保護者は、「自分の子どもも、高校生に行けるってことを一番わかりました」と喜んで帰っていった。外国人保護者の中には高校進学について知りたいたいと思っても、母語で十分に情報を得られない状況がある。そのため母語を介するガイダンスの開催と継続は重要である。

実践の内容とその過程

本実践ではガイダンス終了直後の振り返りを重視した。参加者は講師、通訳、高校生、行政、開催者の計12名で、それぞれの立場から反省点や改善案等を出し合った。

結果と考察

振り返りでは、全体説明会のあり方、高校ブース作りの工夫、通訳の入り方、学校現場への周知方法等に関する課題が挙げられた。例えば高校ブースにおいては、母語で話せるブースに集中する保護者の姿がみられた。これは、母語で情報を得たいという保護者の意向の現れと考えられる。そこで次回、高校ブースに関しては開設する高校の選択と対応言語の充実を図る必要がある。

今回のガイダンスでは、終了直後に振り返りを行い、様々な立場から様々な観点で意見を述べる場を設けた。これは本ガイダンスが目指す開発型プロジェクトとしての試みである。ガイダンスを意義ある形で継続していくために、終了直後に関係者と意見を交わし、次の開催における課題を探っていくことが重要であると考えられる。

【引用文献】

文部科学省 HP「日本語指導の必要な児童生徒の受け入れ状況等に関する調査（平成28年度）」

[<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000001016761,2017/9/21> 検索]